女人成仏
――および女身成仏――

鈴木隆泰

0. 問題の所在

仏教は、『涅槃経（マハーパリニルヴァーナ・マハースートラ *Mahāparinirvāṇamahāsūtra*）』の「一切衆生悉有仏性（一切衆生、悉く仏性を有す）」に代表されるように、[1] 一切衆生の平等性を説く宗教であるといわれている。ところがその一方で、「仏教には女性差別の思想がある」との批判も提出されている。[2] この両者の意見対立を巡る問題に関しては、[3] 筆者の管見によるかぎり、統一的な解答は出されていないように思われる。そこで本稿では、

1. 女性一般の場合
2. 優婆夷の場合
3. 比丘尼の場合
4. 菩薩、ブッダの場合
5. 日蓮遺文

以上の五つに場合分けをし、それぞれにおいて女性がどのように見なされているかを考察する。そしてそれらをもって、仏教、『法華経』、そして日蓮（一二二二―一二八二）が「女性の覚り・成仏」をどのように捉えていたのかを再確認していきたい。

1. 女性一般の場合

仏教において女性（一般）がどのように位置づけられているかについて、『ディーガ・ニカーヤ（長部経典）』第三巻所収の『シンガーラ青年への教誡（シンガーローヴァーダ・スッタンタ。[4] 漢訳は尸迦羅越六方礼経（T. No. 16）、長阿含善生経（T. No. 1）など）』を見ていくこととしよう。

マガダ Magadha 国の首府王舎城（ラージャグリハ Rājagṛha）[5] に住むシンガーラ青年（シンガーラカ Siṅgālaka）は父親の遺命を守り、河で沐浴した後、東方、南方、西方、北方、下方、上方の順に六方を毎朝礼拝していた。王舎城への托鉢の途上、その模様を眼にした釈尊は、彼に礼拝行のわけを尋ねた。それを受けてシンガーラ青年が答える。

〔シンガーラ青年〕「尊師よ、父が亡くなる際に私に言ったのです。〝愛しい我が息子よ、諸方を礼拝しなさい〟と。尊師よ、それでかくいう私は父の遺言を恭敬し、尊重し、尊敬し、崇拝しながら、早朝から起き出し、王舎城を出て、〔河で沐浴して〕衣服と髪を洗ったうえで、東方、〔南方、西方、北方、下方、〕上方の〔六方〕それぞれの方角を合掌し礼拝しているのです。」[6]

〔釈尊〕「長者の息子よ、聖者の律（作法）においては、六方をそのようなやり方で礼拝してはならない。」[7]

シンガーラ青年が父親の遺命を守っているだけで、礼拝行の意味・意義を把握していないことを確認すると、釈尊は彼の礼拝行自体を禁止するのではなく、「聖者の作法においては」、すなわち「仏教式には」どのように六方を礼拝すべきかを教誡していく。

〔釈尊〕「実に、長者の息子よ、聖なる仏弟子はいかにして六方を〔礼拝し〕守護するのであろうか。六方とは〔実は〕次のようであると理解しなさい。東方は父母である。南方は師匠たちである。西方は妻子である。北方は友人・同輩である。下方は下僕・雑役夫・傭人である。上方は沙門（ヴェーダ聖典の権威を認めない出家の宗教家）・バラモン（ヴェーダ聖典の権威を認める在家の宗教家）である。」[8]

そして釈尊は順次に、六方の礼拝・守護の仕方をシンガーラ青年に教えていく。その中で釈尊は、西方に相当する妻子の礼拝・守護の仕方も教えるわけであるが、実際に取りあげられているのは、左記のように「妻」だけであった。

〔釈尊〕「実に、長者の息子よ、五つのしかたで夫は、西方にあたる妻に奉仕しなければならない。すなわち、①尊敬する、②不遜でない、③不倫をしない、④家の実権を与える、⑤装身具を与えることによってである。」[9]

〔釈尊〕「また、長者の息子よ、これら五つのしかたで夫に奉仕された、西方にあたる妻は、五つのしかたで夫を愛する。すなわち、①家業を善く処理する、②夫の従者をよくもてなす、③不倫をしない、④集めた財を守る、⑤なすべき諸々の仕事一切について巧みで勤勉である。」[10]

〔釈尊〕「実に、長者の息子よ、（中略）このようにすれば西方は守護され、安全で、心配がない。」[11]

六方の正しい礼拝・守護の仕方を教えた釈尊は、総まとめとして偈頌（げじゅ）を説いた。

〔釈尊〕「東方は父母である。南方は師匠たちである。西方は妻子である。北方は友人・同輩である。下方は下僕・傭人である。上方は沙門・バラモンである。

極めて有能な在家の家長は、これらの方角を礼拝しなさい。

賢く、善い習慣を身につけ、温和で、弁才を有し、慎ましい生活を送り、頑固でない、そのような人は名声を得るのである。

勢力的で、怠ることなく、苦境に陥っても動揺することなく、行い（生活）を乱さず、聡明である、そのような人は名声を得るのである。

人々をよくまとめ、〔真の〕友をつくり、寛容で、物惜しみを離れ、指導者であり、教導者であり、相手に応じて導く者である、そのような人は名声を得るのである。

布施と、愛語と、この世における利行と、そこここにおいて適切に、諸々のことがらにおいて協同すること（同事）、これらが世間における〔四〕摂事である。

それはあたかも、進み行く車の〔車輪を繋ぎ止める〕くさびのようである。

もしもこれら〔四〕摂事を行わないならば、母親は、母なるがゆえに〔子から〕受けるべき、尊敬も扶養も得られなくなるであろう。

父親も、父なるがゆえに〔子から〕受けるべき、〔尊敬も扶養も得られなくなるであろう。〕

これら〔四〕摂事を、諸々の賢者たちはよく観察（かんざつ）するがゆえに、彼らは偉大となり、称讃を得るようになるのである。」[12]

これまでの教誡を受けたシンガーラ青年は、釈尊に対して優婆塞（うばそく）（ウパーサカ upāsaka。男性の在家仏教徒）となりたいと申し出る。

〔シンガーラ青年〕「尊師よ、素晴らしいことです。尊師よ、素晴らしいことです。尊師よ、それはちょうど、倒れたものを起こすように、覆われたものを明かすように、迷える者に道を指し示すように、〝眼ある者たちはものを見るであろう〟と暗闇で燈火を掲げてものを見させてくれるように、世尊は数多の手段を講じて（種々の方便をもって）法（教え）をお示しくださいました。尊師よ、かくいう私は、世尊（仏）と、教え（法）と、比丘サンガ（僧。男性出家仏教徒の集団）に帰依いたします。世尊は、私を優婆塞としてお認めください。今日よりこの命が尽きるまで〔三宝に〕帰依いたします。」[13]

この『シンガーラ青年への教誡』では、夫は妻に対して、①尊敬する、②不遜でない、③不倫をしない、④家の実権を与える、⑤装身具を与えることによって「奉仕」しなければならないと説かれている。これは次に見るように、『マヌ法典』に表された、「インド一般における女性観」とは著しい対照をなしているといえる。[14]

この世において男を堕落させるのは女の天性である。それゆえ賢者は女に対して心を許してはならない。（『マヌ法典』二・二一三）[15]

なぜならば女はこの世において、愚者のみならず賢者をも、欲望と怒りの奴隷とし、邪道に導くものであるから。（『マヌ法典』二・二一四）[16]

女はこの世において、いかに注意深く監視されても、男に対する欲情と浮気心と性来の薄情のゆえに、夫に対し不貞をはたらく。（『マヌ法典』九・一五）[17]

少女、若い女、老女を問わず、女はなにごとも独立になしてはならない。家事においても同様である。（『マヌ法典』五・一四七）[18]

〔女は〕幼児期には父に、若いときには夫に、夫の死後には息子たちに従属する。女は決して独立することはできない。（『マヌ法典』五・一四八）[19]

たとえ夫が行状悪く、勝手気ままに振る舞い、諸徳に欠けていても、貞女たる者は常に〔彼に〕神のごとく奉仕せねばならない。（『マヌ法典』五・一五四）[20]

2．優婆夷の場合

「次第説法（布施や離欲の功徳を説き、その後に〈四諦（苦諦・集諦・滅諦・道諦）〉を説く教説）」を受けた、ヤシャス（Yaśas。耶舎。在家の状態から出家した最初の仏弟子）の母親と妻は、仏教史上最初の優婆夷（ウパーシカー upāsikā。女性の在家仏教徒）となった。

〔ヤシャスの母親と妻〕「尊師よ、素晴らしいことです。尊師よ、素晴らしいことです。〔尊師よ、それはちょうど、倒れたものを起こすように、覆われたものを明かすように、迷える者に道を指し示すように、〝眼ある者たちはものを見るであろう〟と暗闇で燈火を掲げてものを見させてくれるように、世尊は数多の手段を講じて（種々の方便をもって）法（教え）をお示しくださいました。〕尊師よ、かくいう私たちは、世尊（仏）と、教え（法）と、比丘サンガ（僧）に帰依いたします。

世尊は、私たちを優婆夷としてお認めください。今日よりこの命が尽きるまで〔三宝に〕帰依いたします。」[21]

先の「**1．女性一般の場合**」で見たように、シンガーラ青年（男性）が優婆塞になる際とまったく同じ手続きで、女性は優婆夷になれることが分かる。このように仏教においては在家信者（優婆塞・優婆夷）になるについて、男女の差違は一切存在していないのである。

3．比丘尼の場合

次に、比丘尼（ビクシュニー bhikṣuṇī。女性の出家仏教徒）の場合について見てみよう。[22] 釈尊が王子（ガウタマ・シッダールタ Gautama Siddhārtha）であったときの養母である、叔母マハープラジャーパティー・ガウタミー（Mahāprajāpatī Gautamī。摩訶波闍波提（まかはじゃはだい）・憍曇弥（きょうどんみ））が主要な人物となる。彼女は釈尊に女性の出家を認めてくれるよう懇請する。

〔マハープラジャーパティー〕「尊師よ、願わくは女性が、如来 tathāgata がお教えになった法 dharma と律 vinaya のもとで出家することをお許しください。」[23]

ところが釈尊は女性の出家を認めようとはしない。彼女が三度にわたってお願いしたにもかかわらず、釈尊は女性の出家を許可しなかった。マハープラジャーパティーは悲しみに打ちひしがれ、涙を流しつつも、釈尊に敬礼（きょうらい）してから去っていった。ちなみにこのとき、なぜ女性の出家を許可しないのかの理由は一切語られていない。

その後、釈尊はシャーキャ（Śākya。釈迦）国の首府カピラヴァストゥ Kapilavastu を出立し、南東のヴリジ Vṛji 国の首府ヴァ

イシャーリー Vaiśālī にある大林重閣講堂へと移動した。するとマハープラジャーパティーは、自らの髪の毛を剃除し、糞掃衣を身に纏うという「僧形」となったうえで、出家を希うシャーキャ族の多くの女性たちとともに釈尊の後を追いかけ、ヴァイシャーリーの大林重閣講堂へとやって来た。そして彼女は、長距離の移動で足は腫れ、身体は埃にまみれた状態で、涙を流しながら講堂の門の外に立ち尽くしていた。

それを見届けたアーナンダ（Ānanda。阿難。釈尊の侍者比丘）は、マハープラジャーパティーのもとへと赴き、事の次第を問うた。そこで彼女がアーナンダに、釈尊が女性の出家をどうしても許可してくれないことを告げると、アーナンダは、

「ここでしばらく待っていてください。私が世尊に、女性も如来がお教えになった法と律のもとで出家できるようお願いしてきます。」[24]

と言って、釈尊のもとへと向かった。

アーナンダは釈尊のもとへと赴き、敬礼した後、釈尊と対面して坐った。そして講堂の門の外ではマハープラジャーパティーが足は腫れ、身体は埃にまみれた状態で、涙を流しながら立っていること、そして彼女から、釈尊が女性の出家をどうしても認めようとしないと聞いたことを告げたうえで、改めて女性の出家を認めるようにお願いした。ところが、先のマハープラジャーパティーのときと同様に、アーナンダが三度にわたって懇請したにもかかわらず、釈尊の答えは変わらない。「女性が出家することを許さない」の一点張りであった。そして今回も、なぜ女性の出家を認めないのかの理由は、一切説明されなかった。

釈尊が理由も述べないままに、頑として首を縦に振らないので、アーナンダは作戦を変更する。アーナンダが釈尊に問うた。

〔アーナンダ〕「尊師よ、もし女性が如来がお教えになった法と律のもとで出家したら、預流（スローターパンナ srotāpanna）

果や、一来（サクリダーガーミン sakṛdāgāmin）果や、不還（アナーガーミン anāgāmin）果や、阿羅漢（アルハット arhat）果（四果）を証得することは可能でしょうか。」[25]

釈尊は「可能である」と返答した。ということは、釈尊が女性の出家を認めないのは、女性には覚り・解脱の可能性がないから、という理由ではなかったことになる。仏教の究極目標は、覚りを得て涅槃・解脱の境地に至ることである。そしてカースト社会の存するインドにおいては、その境地は出家修行を通してのみ獲得することができる。[26] その境地（少なくとも阿羅漢果まで）に至る可能性が女性にもあるというのに、なぜか釈尊は女性の出家を認めようとしない。まことに不可解かつ不合理といわざるをえない。そこでアーナンダがたたみかける。

〔アーナンダ〕「尊師よ、もし女性でも如来がお教えになった法と律のもとで出家したら、〔預流果や、一来果や、不還果や、〕阿羅漢果（四果）を証得することが可能であるならば、尊師よ、マハープラジャーパティー・ガウタミーは世尊の叔母であり、養母であり、養育者であり、お乳を与えてくれた大恩人です。生母が亡くなって以降、世尊に母乳を与えてくれたお方です。尊師よ、願わくは女性が、如来がお教えになった法と律のもとで出家することをお許しください。」[27]

情に訴えかけるアーナンダに対して釈尊はついに折れ、妥協案を提示した。釈尊は、マハープラジャーパティーが八敬法（八重法、八敬戒ともいう）を受け入れるのであれば、それをもって受戒と認めると告げたのであった。

八敬法

（1）比丘尼（ビクシュニー bhikṣuṇī。仏教における正式な女性の出家者）は、たとえ出家してから百年経っていたとしても、

その日に出家した比丘に対して、敬礼・合掌して尊敬しなければならない。

（2）比丘尼は、比丘のいない場所で雨安居[28]を行ってはならない。

（3）比丘尼は、半月ごとに比丘サンガのもとで布薩[29]を行い、教誡を請わなければならない。

（4）比丘尼は、雨安居が終了したら、比丘サンガ・比丘尼サンガの双方において、自恣[30]を行わなければならない。

（5）比丘尼は、尊重法（僧残罪。サンガ追放となる波羅夷の次に重い罪。一定期間の謹慎が科せられる）を犯した場合、比丘サンガ・比丘尼サンガの双方において、半月の間、謹慎しなければならない。

（6）式叉摩那（シクシャマーナー śikṣamāṇā。比丘尼見習いの最終段階）は二年間学んだ後、比丘サンガ・比丘尼サンガの双方において受戒しなければ比丘尼にはなれない。

（7）比丘尼は、どのような理由があろうとも、比丘を罵倒したり非難してはならない。

（8）今日より後、比丘尼の比丘に対する言路は閉ざされ（比丘が罪を犯しても比丘尼はそれを指摘できない）、一方、比丘の比丘尼に対する言路は閉ざされない。[31]

アーナンダはマハープラジャーパティーのもとへと戻り、事情を説明すると、マハープラジャーパティーはもちろん八敬法を受け入れると答えた。これが彼女の出家受戒の儀式となった。

現代的な感覚から見るかぎり、八敬法のどれを取りあげても不合理といえる。仏教的に見ても、特に（1）の「比丘尼は、たとえ出家してから百年経っていたとしても、その日に出家した比丘に対して、敬礼・合掌して尊敬しなければならない」は理解しがたい内容になっている。

仏教サンガにおける序列は、正式に出家してからの期間（法臘）のみによって決定される。法臘の長い比丘は上座に置かれ、法臘の短い比丘から敬礼を受ける。それは、法臘の短い比丘に比べて法臘の長い比丘の方が、「具足戒（正式な出家者が持つ完全

な律）を護持する」と宣言し（誓い）、それを護り続けている期間が長いため、最初の宣言が真実（サティヤ satya）のことば（真実語。サティヤヴァチャナ satyavacana）となって、覚りへと向かういっそう大きな力をその比丘に与えているからである。[32]この考え方に則るかぎり、（1）の規定はまったく不可解かつ不合理なものといえる。インドにおいては、サティヤのことばの力を得ることに関して、男女の差はない。[33]いわば（1）の規定は、仏教はおろかインドの常識さえ無視しているのである。

アーナンダが、マハープラジャーパティーが八敬法を受け入れたことで正式な比丘尼となったことを釈尊に伝えると、釈尊はまたもや驚くべき発言をした。

〔釈尊〕「もしも、アーナンダよ、女性が如来が教えた法と律のもとで出家をしなかったならば、アーナンダよ、梵行（ブラフマチャリヤ brahmacarya。不姪の仏道修行）は久しくとどまり、正法（サッダルマ saddharma）も千年続いたであろう。ところが、アーナンダよ、女性が如来が教えた法と律のもとで出家をしてしまったため、アーナンダよ、梵行は久しくとどまることなく、アーナンダよ、正法も五百年しか続かないであろう。」[34]

〔釈尊〕「たとえば、アーナンダよ、たわわに実った稲田に白黴（しろかび）という疫病が発生してしまうと、その稲田が今後存続することができないのとまったく同様に、アーナンダよ、女性が〔如来が教えた〕法と律のもとで出家するならば、梵行が久しくとどまることはないであろう。」[35]

インド社会は生まれながらの浄・不浄、上下尊卑の観念を伴う、血統主義に基づくカースト社会である。それに対して仏教は、人の尊卑はその人がどのような行為・行いをしているかによって決定されるという、徹底的な行為主義に立脚する宗教である。このことは、最古層の仏典のひとつとされる『スッタニパータ *Suttanipāta*（経集）』の第一三六偈と第一四二偈において、

人は生まれ（カースト）によって卑しい者となるのではない。生まれによって尊い者となるのでもない。人は行いによって卑しい者ともなり、行いによって尊い者ともなるのである。

と、繰り返し述べられていることからもはっきりと分かる（注26参照）。

インド社会はカースト社会のため、インド社会にとどまる在俗生活のままでは、行為主義に基づく仏教の実践を完遂することはできない。「よりよい生まれ変わり（転生。最高の目標は天界に生まれ変わる〝生天〟）」を目的とするインドの在家仏教徒（優婆塞、優婆夷）はさておき、修行を完成させて、覚り・涅槃・解脱という究極目標を得ようとする仏教徒は、インドではどうしても出家せざるをえないのである。

インド社会に生きる者（インドの在家者）にとって、古来「人生の三大目標（トゥリ・ヴァルガ trivarga）」とされているものがある。それらは、

①ダルマ dharma（義務。カースト成員に課せられる様々な規制に従うこと）

②アルタ artha（実利。カースト固有の仕事に従事し、家族を養い育てること）

③カーマ kāma（愛欲。性行為を通して、カースト成員を再生産すること）

であり、いずれもカーストの存続に資するものとなっている。インドの在家者は、①ダルマを実行しつつ、②アルタを追求し、そして③カーマに満ちた生活を送ることを「人生の目標」としている。理財追求や愛欲を「汚れたもの」と見なす風潮（特にキリスト教に顕著）など、カーストに基づくインド社会とは無縁の存在といえる。そしてインドにおける出家者とは、これら「人生の三大目標」を放棄した人々のことを指すのである。

アルタを放棄した出家者は、仕事に従事して自らの生活の糧を稼ぐことはできず、また、家族も捨てなければならない。カーマを解放して性生活を送り、子孫をもうけることも許されない。ダルマはカースト社会の義務ではなく、宗教上の法（仏教でい

えば仏法。原語は同じくダルマ dharma）に従うことになる。

釈尊を含めた比丘サンガ構成員は全員が出家者であるため、カーマを捨て、梵行（不姪の仏道修行）を修することが、カーストのあるインドでは絶対条件となる。もし出家者が梵行を放棄したとしたら、その人はもはや「出家者」とは見なされなくなり、在家者からの支援が得られなくなる。出家者はアルタを放棄しているため、在家者からの物的・経済的支援がなければ、命脈を保つことができない。梵行を修し、自らが立派な福田（プニャ・クシェートラ punyakṣetra）であることを在家者にアピールすることは、インドにおける出家者にとっては、自分たちが生き延びていくためにも必須の要件であった。

そのために、釈尊は男だけの集団であるサンガを形成したのである。そうであるにもかかわらず、カーマの最大の対象である女性が仏教の出家者世界に入ってくるのは、男性出家者たちからすれば「とてつもなく大迷惑」な出来事であったにちがいない。〝女性には可能なかぎり、自分たちの世界に入ってきてもらいたくない〟というのが、八敬法を定めた釈尊の偽らざる本音であったのだと思われる。[36]

八敬法は比丘のカーマを制御するために設定された。そのため、いかにそれが理不尽で、インドの常識に反していても、釈尊がそれを翻すことはなかったのである。

さて、八敬法を受け入れて比丘尼となったマハープラジャーパティーであったが、インドの常識に反する（1）の「比丘尼は、たとえ出家してから百年経っていたとしても、その日に出家した比丘に対して、敬礼・合掌して尊敬しなければならない」には、正直なところ、従いがたいという思いがあった。

そこで彼女は今回も、情深く女性からの信頼に篤いアーナンダにお願いをした。

〔マハープラジャーパティー〕「アーナンダさま、私は世尊に対してひとつのお願いがございます。願わくは世尊が、比丘、比丘尼の区別なく法臘に従って敬礼し、起って迎え入れ、合掌し、恭敬することをお許しくださいますように。」[37]

そこでアーナンダが世尊のもとに赴いてその旨を伝えると、釈尊は、

「アーナンダよ、〔比丘が〕女性（比丘尼）に対して敬礼し、起って迎え入れ、合掌し、恭敬することを、如来が許可する道理も余地もまったくない。」[38]

と拒否した。そして比丘たち全員に告げた。

〔釈尊〕「比丘たちよ、女性（比丘尼）に対して敬礼しても、起って迎え入れても、合掌しても、恭敬してもならない。もしなした者があれば、突吉羅（ときら） duṣkṛta（自ら懺悔（さんげ）することで許される罪）とする。」[39]

なんと釈尊は、比丘尼のサティヤの力を尊重する行為は戒律違反であるとまでいうのである。サティヤの力を得ることに関して、男女ともに差がないという「インドの常識」は、実は「インド社会における常識」なのであって、インド仏教の出家世界ではかえって「非常識」になることになる。インド仏教の出家世界にあっては、男性のカーマを制御するため女性は男性の完全な管理下に置かれ、在家者であれば当然のように認められる権利すらも認められない。インド社会は男尊女卑だといわれることが多いが、インド仏教の出家世界は、ある意味でインド社会以上に女性の尊厳が損なわれ、権利が奪われているという側面もあったのである。世の中には、「梵行を実践し続けるインド型の出家こそが、本当の出家だ」という考えの方もいまだに少なくないかもしれない。しかし、そのような方にも、インド型の出家にも様々な問題があることはご理解いただきたいと思っている。

4．菩薩、ブッダの場合

4―1．『無量寿経』（*Sukhāvatīvyūha*）

続いて大乗経典を見てみよう。まずは「浄土三部経」のひとつとされる『無量寿経（スカーヴァティーヴューハ *Sukhāvatīvyūha*）』である。ダルマーカラ（Dharmākara。法蔵）比丘が、世尊ローケーシュヴァララージャ（Lokeśvararāja。世自在王）に対し、諸誓願（梵本47願、漢訳48願）を発していく場面である。

〔ダルマーカラ比丘〕「世尊よ、私が菩提を獲得したとき、無量・無数の仏国土にいる衆生たちが、私の名号（阿弥陀。無量光 Amitābha、無量寿 Amitāyus）を聞いて、その〔スカーヴァティー（極楽）という〕仏国土に生まれよう（往生しよう）と心をかけ、諸々の善根を差し向けるでありましょうが、もしも〔そこに往生しようと〕十度までも心を発した（十念した）にもかかわらず、彼らがかの仏国土に生まれ〔変わ〕ることがないようなことがあれば、その間は、私は無上正等覚（阿耨多羅三藐三菩提）を証得することはいたしません。ただし、〔殺母・殺父・殺阿羅漢・出仏身血・破和合僧という五〕無間業を犯した〔衆生たち〕や、正法（仏法）を誹謗するという〔煩悩の〕障礙に覆われている衆生たちは、そのかぎりではありません。（第19願）」[40]

〔ダルマーカラ比丘〕「世尊よ、私が菩提を獲得したとき、あまねく無量・無数・不可思議・無比・無辺の仏国土にいる女性たちが、私の名号を聞いて、浄信を生じ、菩提心を発し、女性の身であることを厭うでありましょうが、彼女たちがみな、今生を離れて〔スカーヴァティー世界に往生して〕後、もしも再び女性の身を得るようなことがあれば、その間は、私は無上正等覚を証得することはいたしません。（第35願）」[41]

ダルマーカラ比丘はこれらの誓願を完成させたことで、誓願がサティヤ（真実、言ったとおり）のことばとなり、そのサティヤのことばの力によって成仏し、阿弥陀仏と成った。[42] その阿弥陀仏の浄土であるスカーヴァティー（Sukhāvatī。極楽）には、男性しかいないことがよく分かる記述となっている。

4―2．『法華経』（*Saddharmapuṇḍarīka*）

いよいよ「一乗（エーカ・ヤーナ ekayāna）」すなわち「万人成仏」を説く、『法華経（サッダルマプンダリーカ *Saddharmapuṇḍarīka, SP*）』である。『法華経』に関しては、鳩摩羅什（クマーラジーヴァ Kumārajīva。三四四―四一三）による漢訳『妙法蓮華経』（SP_{C2}）に親しんできた方が多いであろうことを考慮して、サンスクリット刊本（SP_S）[43] からの筆者による和訳文と、それに対応する SP_{C2} の漢訳文とを、両者を比較対照できるようにブロック毎に併記していく。

4―2―1．「提婆達多品」（後半）（Stūpasaṃdarśana-parivarta）

最初は、女人成仏を説くとされる「提婆達多品」の後半である。SP_{C2} の漢訳語[44] には「女身垢穢非是法器（女身は垢穢にして是れ法器に非ず）」「女人身猶有五障（女人の身には猶お五つの障り有り）」「變成男子（変じて男子と成って）」等の記述があり、「0．問題の所在」で触れたように、古来議論の的となってきた。

そのときマンジュシュリー・クマーラブータ（Mañjuśrī Kumārabhūta。文殊師利童真）は、プラジュニャークータ（Prajñākūṭa。智積）菩薩に次のように告げた。「善男子よ、この〔大海中より来集した〕衆生の教化はすべて、私が大海の中にいる間に行ったのです。そ〔の結果〕がここに現れているのです。」[45]

文殊師利謂智積曰．於海教化，其事如是．（SP_{C2} 35b5-6）

そこでプラジュニャークータ菩薩はマンジュシュリー・クマーラブータに、偈頌の詠唱をもって〔次のように〕尋ねた。[46]

爾時智積菩薩，以偈讃曰．（*SP*$_{C2}$ 35b6-7）

「大いなる幸福をお持ちの方よ、智慧に関して勇者という名をお持ちの方よ、今、あなたが教化したあれら無数の衆生たちがありますが、このことはどのような〔教えの〕威力（いりき）によるのでしょうか。人中の神〔のごときお方〕よ、そのことをお尋ねしますので、あなたはこのことをお話しください。[47]

大智徳勇健，化度無量衆，今此諸大會，及我皆已見．（*SP*$_{C2}$ 35b8-9）

あなたがいかなる法（教え）、菩提への道を教示するいかなる経典を説いたので、それを聞いてあの者たちが菩提への心（菩提心）を発（おこ）し、一切智（仏）たること（仏位）への基礎をしっかりと固めたのですか。」[48]

演暢實相義，開闡一乘法，廣導諸衆生，令速成菩提．（*SP*$_{C2}$ 35b10-11）

マンジュシュリーは言った（答えた）。「〔私は〕大海中においてはサッダルマプンダリーカ〔という〕経典〔だけ〕を説き、その他は〔説いたことは〕ありません（私が大海中で説いた経典は、サッダルマプンダリーカにほかなりません）。」[49]

文殊師利言．我於海中，唯常宣説妙法華經．（*SP*$_{C2}$ 35b12-13）

プラジュニャークータ〔菩薩〕は言った（尋ねた）。「この経典は甚深で、微妙（みみょう）で、理解しがたく、他の経典でこの経典に匹敵するものはありません。[50]

智積問文殊師利言．此經甚深微妙，諸經中寶，世所希有．（*SP*$_{C2}$ 35b13-14）

〔ですから、〕この〔諸〕経典中の宝を会得し、無上正等覚を証得することのできる衆生は〔大海中から来集した者たちの中に〕誰かあるのですか。」[51]

頗有衆生，勤加精進，修行此經，速得佛不．（*SP*^{C2} 35b14-15）

マンジュシュリーは言った（答えた）。「善男子よ、〔そのような者があの者たちのうちに〕あるのです。サーガラ龍王の娘（サーガラナーガラージャドゥヒトゥリ Sāgaranāgarājaduhitṛ）が当年とって八歳なのですが、大きな智慧をそなえ、鋭敏な感覚器官（感性）を持ち、身口意の〔三〕業は智によって統御されており、一切の如来所説のことばと意味を理解するためのダーラニー（dhāraṇī。陀羅尼、総持）を得ており、一切法（すべてのことがら）と〔一切〕衆生に精神を集中させる幾千もの三昧を一刹那のうちに獲得しており、不退転の菩提心を発しており、広大な誓願を立てており、一切衆生に対して自分自身に対して抱くような愛情を抱いており、功徳を生み出す（発揮する）ことができ、しかもそれら〔功徳〕の欠けることがありません。[52]

文殊師利言．有娑竭羅龍王女，年始八歳，智慧利根，善知衆生諸根行業，得陀羅尼，諸佛所説甚深祕藏悉能受持，深入禪定，了達諸法．於刹那頃發菩提心，得不退轉．辯才無礙，慈念衆生猶如赤子，功德具足．（*SP*^{C2} 35b15-20）

顔には笑みを浮かべ、最上最勝の容色をそなえ、慈しみの心を持ち、慈愛に満ちたことばを語ります。[53]

心念口演，微妙廣大．慈悲仁讓，志意和雅，（*SP*^{C2} 35b20-21）

彼女は〔無上〕正等覚を証得することができます。」[54]

能至菩提．（*SP*^{C2} 35b21）

したがって、この時点ではまだ龍女は覚っていないものと判断される。[55] このことは、「歴劫修行」の立場に立っているプラジュニャークータ菩薩の面前で、龍女が「疾得成仏」を示す（後述）という対比からも是認されるであろう。龍女がすでに覚っており成仏していたとすれば、「成仏するためには歴劫修行が必要だ。疾得成仏は不可能なのだ」とする見解を乗り越えられないからである。

プラジュニャークータ菩薩は言った（反論した）。「私が拝見しているところでは、世尊であるシャーキャムニ（Śākyamuni。釈迦牟尼）如来が〔かつて〕菩薩として菩提を求めて励んでおられるとき、数多の福徳を積まれ、幾千劫[56]もの長きにわたり決して精進努力をなおざりになさいませんでした。[57]

智積菩薩言．我見釋迦如來，於無量劫難行苦行，積功累德，求菩提道，未曾止息．（SP_{C2} 35b21-23）

〔この〕三千大千世界の中で、こ〔の釈迦如来〕が衆生利益のために身体をお捨てにならなかった（捨身されなかった）土地は、芥子粒ほどすらもないのです。〔そしてその〕後に菩提を覚られたのです。[58]

觀三千大千世界，乃至無有如芥子許，非是菩薩捨身命處．爲衆生故．然後乃得成菩提道．（SP_{C2} 35b23-25）

〔ですから〕こ〔の龍女〕が一瞬のうちに無上正等覚を証得することができようなどと、いったい誰が信じることができましょうか。[59]

不信此女於須臾頃便成正覺．（SP_{C2} 35b25-26）

「歴劫修行」の観念を持つプラジュニャークータ菩薩が疑問視しているのは龍女の「疾得成仏」であり、「女人成仏」ではない

ことが分かる。

するとそのとき見ると、サーガラ龍王の娘が〔大海中より現れた会衆の〕先頭に立っていた。[60]

言論未訖，時龍王女，忽現於前．（*SP*$_{C2}$ 35b26-27）

彼女は世尊の両足に額をつけて敬礼（頭面接足帰命礼）し、対面して立った。そしてそのとき、以下の諸偈を説いた。[61]

頭面禮敬，却住一面，以偈讃曰．（*SP*$_{C2}$ 35b27）

「〔世尊の〕あらゆる福徳は甚深で、あらゆる方角（十方すべて）に満ち溢れて（遍満して）います。微妙なるお身体は三十二相で美しく飾られており、[62]

深達罪福相，遍照於十方，微妙淨法身，具相三十二．（*SP*$_{C2}$ 35b28-29）

〔八十〕種好もそなえ、一切衆生に敬礼されています。あたかも市場〔に赴くか〕のように、一切衆生が詣でにいこう（往詣しよう）とします。[63]

以八十種好，用莊嚴法身，天人所戴仰，龍神咸恭敬，一切衆生類，無不宗奉者．（*SP*$_{C2}$ 35c1-3）

私が望むまま〔に得るところ〕の〔無上にして〕完全な菩提、そのことに関しては〔釈迦〕如来〔のみ〕が私の証人なのです。〔無上正等覚を得てブッダ如来と成り、衆生を〕苦より救済する広大な法（教え）を私は説くことにしましょう。」[64]

又聞成菩提，唯佛當證知．我闡大乘教，度脱苦衆生．（*SP*$_{C2}$ 35c4-5）

するとそのとき、尊者シャーリプトラ（Śāriputra。舎利弗）が、かのサーガラ龍王の娘に次のように言った。[65]

時舍利弗語龍女言．（SP_{C2} 35c6）

「善女人よ、そなたが［無上］菩提に向けて不退転に発心し、無量の智慧をそなえていたとしても、それだけでは正遍知の位（仏位）は得がたいのである。[66]

汝謂不久得無上道．是事難信．所以者何．女身垢穢非是法器．云何能得無上菩提．（SP_{C2} 35c6-8）

SP_Sには「女性が汚れている」との表現は見られない。

善女人よ、女性が精進するのに懈怠なく、幾百や幾千もの数多の劫をかけて福徳を積み、六波羅蜜（シャト・パーラミター ṣaṭ-pāramitā。布施 dāna・持戒 śīla・忍辱 kṣānti・精進 vīrya・禅定 dhyāna・智慧 prajñā という六つの徳目を完成させて到彼岸すること）を成満したとしても、今まで仏位を得た者はないのである。[67]

佛道懸曠．經無量劫，勤苦積行，具修諸度，然後乃成．（SP_{C2} 35c8-9）

それはなぜか。［それは］女性は今まで、五つの位に到達したことがないからである。五つとはなにかといえば、第一にブラフマー（Brahmā。梵天）の位、第二にシャクラ（Śakra。帝釈天）の位、第三に大王の位、第四に転輪聖王の位、第五に不退転の菩薩の位である。」[68]

又女人身猶有五障．一者不得作梵天王．二者帝釋．三者魔王．四者轉輪聖王．五者佛身．云何女身速得成佛．（SP_{C2} 35c9-12）

SP_Sは「五つの位、状態（パンチャ スターナーニ pañca sthānāni）」と述べているのみで、SP_{C2}に見られる「五つの障り」という女性を貶めるようなニュアンスは認められない。

さてそのとき、サーガラ龍王の娘は、その価値が三千大千世界全体に匹敵するほどの宝珠をひとつ持っていた。[69]

爾時龍女有一寶珠．價直三千大千世界．（SP_{C2} 35c12-13）

かのサーガラ龍王の娘は、その宝珠を世尊に献上した。世尊はそれを、慈悲心ゆえに納受した。[70]

持以上佛．佛即受之．（SP_{C2} 35c13）

そのときサーガラ龍王の娘は、プラジュニャークータ菩薩と長老シャーリプトラに次のように言った（問うた）。[71]

龍女謂智積菩薩尊者舍利弗言．（SP_{C2} 35c13-14）

「私は世尊にここなる宝珠を献上しましたが、世尊はそれを速やかに納受されたでしょうか。それともされなかったでしょうか。」[72]

我獻寶珠．世尊納受．是事疾不．（SP_{C2} 35c14-15）

長老〔シャーリプトラ〕は言った（答えた）。「そなたは速やかに献上したし、世尊も速やかに納受された。」[73]

答言．甚疾．（SP_{C2} 35c15）

サーガラ龍王の娘は言った。「大徳シャーリプトラよ、もし私が〔非常に速やかに宝珠を献上できる〕大神力の持ち主であったとしても、それよりも速やかに〔無上〕正等覚を証得することができるのです。この宝珠の納受は〔それほど速やかでは〕ないのです。」[74]

女言．以汝神力觀我成佛．復速於此．（SP_{C2} 35c15-16）

この個所からも、龍女はまだ成仏していないことが分かる。「証得する（覚る）ことができる」のサンスクリット原語は abhisaṃbudhyeyaṃ であり、optative（願望法）が用いられている。optative は、現時点で実現していない動作・行為を表すものだからである。

するとそのとき、サーガラ龍王の娘は、一切世間〔の衆生〕の面前で、そして長老シャーリプトラの面前で、その女性としての器官が消失し、男性としての器官が現れ出でて、自らが菩薩（男性名詞）であることを〔実際はそうではないのに、あえて〕顕して見せた。〔そして〕そのとき、南方へと進んでいった。[75]

當時衆會皆見龍女，忽然之間變成男子，具菩薩行，即往南方．（SP_{C2} 35c16-17）

岡田［2020: 5-11］が指摘するように、SP_S の「サンダルシャヤティ saṃdarśayati」は「実際はそうではないのに、相手に合わせてあえて顕して見せる」という意味を担えるため、[76] 和訳文にはその旨を補っておいた。

そして南方にあるヴィマラー（Vimalā。無垢）という名前の世界において、七宝からなる菩提樹の下に坐し、自らが覚りを開いて〔ブッダと成り〕、三十二相をそなえ、その身にすべての〔八十〕種好をそなえ、光明をもって十方を照らし出し、

法（教え）を説いているさまを〔あえて〕顕して見せた。[77]

無垢世界，坐寶蓮華成等正覺，三十二相八十種好，普爲十方一切衆生演説妙法．（SP_{C2} 35c17-19）

そしてサハー（Sahā。娑婆）世界の衆生たちはすべて、かの如来が一切の天 deva・龍 nāga・夜叉 yakṣa・乾闥婆（けんだつば） gandharva・阿修羅 asura・迦楼羅（かるら） garuḍa・緊那羅（きんなら） kiṃnara〔・摩睺羅伽（まごらが） mahoraga〕・人 manuṣya・人ならざるもの amanuṣya によって敬礼されながら、法（教え）を説いているさまを見た。[78]

爾時娑婆世界菩薩聲聞天龍八部人與非人，皆遙見彼龍女成佛，普爲時會人天説法，心大歡喜悉遙敬禮．（SP_{C2} 35c19-22）

そして、かの如来の説法を聞いた衆生は、全員が無上正等覚に向けて不退転の者（不退転の菩薩）たちとなった。[79]

無量衆生聞法解悟，得不退轉，無量衆生得受道記．（SP_{C2} 35c22-23）

この「かの如来の説法を聞いた衆生」には当然ながら女性も含まれているであろう。女性を含めた聞法者全員が不退転の菩薩となったということによって、女性が女性のままで菩薩になれることを『法華経』が認めていたことが確認されるのである。

そしてかのヴィマラー世界とこのサハー世界とは〔ひとつの仏土として〕六種に震動した。[80]

無垢世界六反震動．（SP_{C2} 35c23-24）

世尊シャーキャムニの会座にあった三千の生命あるもの（生類）たちは、無生法忍（むしょうぼうにん）[81]を得た。[82]

娑婆世界三千衆生住不退地．（SP_{C2} 35c24）

そして〔その〕三千の生命あるものたちは無上正等覚への授記を得た。[83][84]

三千衆生發菩提心而得受記．（*SP*$_{C2}$ 35c24-25）

先と同様に、この三千の生類には当然ながら女性も含まれているであろう。世尊シャーキャムニの会座にあった女性を含めた三千名が授記を得た（菩薩となった。注83参照）ということによって、女性が女性のままで菩薩になれることを『法華経』が認めていたことが、ここでも再確認されるのである。

そのとき、プラジュニャークータ菩薩大士と長老シャーリプトラは沈黙した。[85]

智積菩薩及舍利弗，一切衆會默然信受．（*SP*$_{C2}$ 35c25-26）

龍女は大海中ではまだ成仏していない。釈尊に宝珠を献上した後、女性の身のままで、即時に（釈尊に宝珠を献上するスピードよりも速く）成仏（即身成仏・疾得成仏）したのである。しかし、「女性の身のままでの成仏（女身成仏）」を信じることのできない長老[86]シャーリプトラのために、実際にはそうではないのに、あえて男性の身となっての成仏を顕しだして見せた。そこにわれわれは、即身成仏した龍女の慈悲心を感じ取ることができるであろう。

4—2—2．「勧持品」（Utsāha-parivarta）

次は、現行*SP*$_{C2}$においては「提婆達多品」に後続する「勧持品」である。

さてそのとき、世尊の母方の叔母であるマハープラジャーパティー・ガウタミー（摩訶波闍波提・憍曇弥）は、有学と無

学の六千人の比丘尼とともに、座より起ち上がり、世尊のいる場所に向かって合掌して敬礼し、世尊を見つめながら立ち尽くしていた。[87]

爾時佛姨母摩訶波闍波提比丘尼，與學無學比丘尼六千人俱，從座而起一心合掌，瞻仰尊顏目不暫捨．（*SP*$_{C2}$ 36a12-14）

そこで、そのとき世尊は、マハープラジャーパティー・ガウタミーに向かって告げた。「ガウタミーよ、どうしてそなたは〝〔世尊は〕私の名を挙げて無上正等覚への授記を与えてはくださらなかった〟と暗い気持ちで立ち尽くし、如来〔であるわたし〕を見つめているのか。[88]

於時世尊告憍曇彌．何故憂色而視如來．汝心將無謂我不説汝名授阿耨多羅三藐三菩提記耶．（*SP*$_{C2}$ 36a14-16）

しかし、ガウタミーよ、〔先の「法師品」で〕一切会衆が授記された際に、そなたも授記されていたのだよ。[89]

憍曇彌，我先總説一切聲聞皆已授記．（*SP*$_{C2}$ 36a16-17）

「法師品」については、「**4—2—5．「法師品」**」で見ていく。

さらにまた、ガウタミーよ、そなたはここ（サハー世界における釈尊のもと）をはじめ、三百八十万・コーティー（一千万）・ナユタ（一千億）もの諸仏のもとで〔諸仏を〕恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し、讃仰（さんごう）し、尊崇して後、法師 dharma-bhāṇaka たる菩薩大士となるであろう。さらには、これら六千人の有学と無学の比丘尼たちも、常にそなたとともにあって、かの諸々の如来 tathāgata・応供 arhat・正遍知 samyaksaṃbuddha たちのもとで、法師たる菩薩〔大士〕となるであろう。[90]

今汝欲知記者，將來之世當於六萬八千億諸佛法中爲大法師，及六千學無學比丘尼俱爲法師．（*SP*$_{C2}$ 36a17-20）

その後、次第に菩薩行を完成させ、そなたは〔この〕世間において、サルヴァサットヴァプリヤダルシャナ（Sarvasattvapriyadarśana。一切衆生喜見）という名の如来・応供・正遍知・明行足 vidyācaraṇasaṃpanna・善逝 sugata・世間解 lokavid・無上士 anuttara・調御丈夫 puruṣadamyasārathi・天人師 śāstā devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca・仏 buddha・世尊 bhagavat と成るであろう。[91]

汝如是漸漸具菩薩道，當得作佛．號一切衆生喜見如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊．（SP_{C2} 36a20-22）

そして、ガウタミーよ、かのサルヴァサットヴァプリヤダルシャナ如来・応供・正遍知は、かの六千人の菩薩たちに順次に、無上正等覚への授記を与えるであろう。」[92]

憍曇彌，是一切衆生喜見佛，及六千菩薩，轉次授記得阿耨多羅三藐三菩提．（SP_{C2} 36a23-24）

さてそのとき、ラーフラ（Rāhula。羅睺羅（らごら））の母であるヤショーダラー（Yaśodharā。耶輸陀羅（やしゅだら））比丘尼はこのように思った。「世尊は私の名を挙げて〔無上正等覚への授記を与えて〕はくださらなかった。」[93]

爾時羅睺羅母耶輸陀羅比丘尼作是念．世尊於授記中獨不説我名．（SP_{C2} 36a24-26）

そこで世尊は心によってヤショーダラー比丘尼の心のはたらきを察知して、ヤショーダラー比丘尼に次のように告げた。「ヤショーダラーよ、そなたに告げ、知らしめてあげよう。そなたもまた、一万コーティーもの諸仏のもとで〔諸仏を〕恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し、讃仰し、尊崇して後、法師たる菩薩〔大士〕となるであろう。[94]

佛告耶輸陀羅．汝於來世百千萬億諸佛法中，修菩薩行爲大法師．（SP_{C2} 36a26-28）

そして順次に菩薩行を完成させ、バドラー世界（Bhadrā。善国）の世間において、ラシュミシャタサハスラパリプールナドヴァジャ（Raśmiśatasahasraparipūrṇadhvaja。具足千万光相）という名の如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と成るであろう。かの世尊であるラシュミシャタサハスラパリプールナドヴァジャ如来・応供・正遍知の寿命の量は無量であろう。」[95]

漸具佛道，於善國中當得作佛．號具足千萬光相如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊．佛壽無量阿僧祇劫．（*SP*$_{C2}$ 36a28-b2）

すると、六千人の比丘尼たちを伴うマハープラジャーパティー・ガウタミー比丘尼と、四千人の比丘尼たちを伴うヤショーダラー比丘尼は、世尊の面前で自らの無上正等覚への授記を聞き、希有の思いに打たれ、未曾有の思いに打たれ、そのとき次の偈を説いた。

「世尊よ、あなたさまは導き手であり導師であり、神々とともなる世間の師です。安穏をお与えくださる方であり、人と天によって供養されます。〔世間の〕保護者よ、私たちも今日、心が満ち足りました。」[96]

爾時摩訶波闍波提比丘尼，及耶輸陀羅比丘尼，并其眷屬，皆大歡喜得未曾有，即於佛前，而説偈言．

世尊導師，安隱天人，我等聞記，心安具足．（*SP*$_{C2}$ 36b2-6）

マハープラジャーパティー・ガウタミー比丘尼にせよ、ヤショーダラー比丘尼にせよ、成仏するのは未来世であるため、女性の身のままで菩薩となり、しかる後に成仏するかどうかは、文面上では確認できないかのように見える。しかし、

・男性になるとは明言していないこと

・女性のままで授記されている（菩薩とされている）こと

・「提婆達多品」の記述
・後（4—2—5）で見る「法師品」の記述

これらを合わせれば、彼女たちが女性のままで菩薩となり、そしてブッダと成っていくことは、揺るがないものと判断される。

4—2—3．「薬王菩薩本事品」（Bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta）

次は、ストゥーパ stūpa（ブッダの遺骨を納めた塔）とチャイティヤ caitya（遺骨を納めない塔）の関係に基づき、その成立過程が問題視されている[97]「薬王菩薩本事品」である。

〔釈尊〕「さらにまた、ナクシャトララージャサンクスミタービジュニャ（Nakṣatrarājasaṃkusumitābhijña。宿王華）〔菩薩〕よ、もしも女性がこの〔サッダルマプンダリーカの〕法門を聞いて把握し、受持するならば、彼女にとってこれがまさしく、女性としての最後の生涯となるであろう。[98]

若有女人聞是藥王菩薩本事品，能受持者，盡是女身後不復受．（SP_{C2} 54b27-29）

ナクシャトララージャサンクスミタービジュニャよ、誰かある女性が後の五百年（後五百歳）にこの「薬王菩薩本事品」を聞いて、〔所説の通りに燃身して〕修行したとしよう。その者はここから死んで後、スカーヴァティー（Sukhāvatī。極楽）世界に再生（往生）するであろう。そこではかの世尊であるアミターユス（Amitāyus。阿弥陀・無量寿）如来・応供・正遍知が菩薩衆に囲繞されて住し、過ごし、暮らしており、その者はそ〔のスカーヴァティー世界〕にある蓮華の中の獅子の座に坐して〔男子として〕化生するであろう。[99]

若如來滅後後五百歲中，若有女人，聞是經典如説修行，於此命終，即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處，生蓮華中寶

座之上．（*SP*$_{C2}$ 54b29-c3）

「男性になってから菩薩となること」を明言しており、「法師品」「提婆達多品」「勧持品」に表明された内容とは文脈・背景を異にするとしか思われない。「女人成仏」「女身成仏」の観点からも、やはり「薬王菩薩本事品」の成立過程には疑義が呈せられる。

4―2―4．「観世音菩薩普門品偈文」（Samantamukha-parivarta）

次は「観世音菩薩普門品」の偈文部分からの引用である。*SP*$_{C2}$の併記がないのは、これらが後代の付加であり、*SP*$_{C2}$には対応個所が存在していないためである。

ローケーシュヴァララージャ（世自在王）を導師とするダルマーカラ（法蔵）比丘は、世間の供養を受け、幾百劫もの長きにわたり修行をした後に、〔諸誓願を完成させ、そのサティヤのことばの力によって〕無垢にして無上の菩提を得〔て阿弥陀仏と成っ〕た。[100]

〔観世音（観自在）菩薩は〕導師アミターバ（Amitābha。阿弥陀仏・無量光仏）を左右から扇ぎながら立っている。〔さらに観世音菩薩は〕〝幻のごとし〟という三昧によって、あらゆる〔仏〕国土に赴いて〔諸〕仏を供養した。[101]

西方に安楽の源泉で塵を離れた〝スカーヴァティー（極楽）〟という世界があり、そこでは衆生を調御（じょうご）する、このアミターバという導師が現在住している。[102]

そこ（スカーヴァティー世界）には女性が生まれることはないし、性行為が行われることもまったくない。〔そこにある〕ジナ jina（ブッダ）のかの実子（菩薩）たちは、無垢で、蓮華の中に〔男子として〕化生し坐している。[103]

4—1で見た『無量寿経』の文脈をそのまま引き継いでいることが分かる。まさに『法華経』には「なくもがな」の記述であるといえよう。

4—2—5．「法師品」（Dharmabhāṇaka-parivarta）

『法華経』参照の最後は「法師品」である。そこでは、極めて注目すべき宣言がなされている。

そのとき世尊は、バイシャジュヤラージャ（Bhaiṣajyarāja。薬王）菩薩大士をはじめとする、かの八万の菩薩たちに告げた。「バイシャジュヤラージャよ、この集会（しゅうえ）にある、多くの天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・人ならざるものたち、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たち、声聞乗の者たち、独覚乗の者たち、菩薩乗の者たちが、如来〔であるわたし〕から直接この〔サッダルマプンダリーカの〕法門を聞いているのをそなたは見ているか。」[104]

爾時世尊，因藥王菩薩，告八萬大士：藥王，汝見是大衆中無量諸天龍王夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人與非人，及比丘比丘尼，優婆塞優婆夷，求聲聞者，求辟支佛者，求佛道者，如是等類咸於佛前，聞妙法華經，（*SP*$_{C2}$ 30b29-c5）

〔バイシャジュヤラージャ菩薩は〕言った（返答した）。「世尊よ、見ています。見ていますとも、善逝よ。」[105]

世尊は告げた。「実に、バイシャジュヤラージャよ、その者たち全員は菩薩大士なのであって、この〔わたしの〕集会にお

いて、〔このサッダルマプンダリーカの法門から〕ただの一偈でも一句でも聞くならば、あるいはまた、この経典に対して一念でも随喜するならば、バイシャジュヤラージャよ、わたしは、これらの四衆全員が無上正等覚を得るであろうと授記する。[106]

一偈一句，乃至一念隨喜者，我皆與授記，當得阿耨多羅三藐三菩提．（*SP*$_{CE}$ 30c5-7）

比丘尼（ビクシュニー bhikṣuṇī）や優婆塞（ウパーシカー upāsikā）（どちらも女性名詞）が、その身のままで菩薩（ボーディサットヴァ bodhisattva。男性名詞）であることを宣言している、極めて重要な個所である。[107] このことから『法華経』が、「菩薩は男性名詞であるから、男性しか菩薩にはなれない」とは考えていないことが明白となる。したがって『法華経』が、「ブッダは男性名詞であるから、男性しかブッダには成れない」とは考えていないことも、論理的に導かれるのである。

さらにまた、バイシャジュヤラージャよ、如来〔であるわたし〕の入滅後に、この〔サッダルマプンダリーカの〕法門を聞く者たちがあって、それがただひとつの偈を聞いて、そして喜ぶ心を発すのがただ一瞬であったとしても、バイシャジュヤラージャよ、〔如来である〕わたしはそれらの善男子・善女人たちは誰であれ、無上正等覚を得るであろうと授記する。[108]

又如來滅度之後，若有人聞妙法華經乃至一偈一句一念隨喜者，我亦與授阿耨多羅三藐三菩提記．（*SP*$_{CE}$ 30c7-9）

〔釈尊〕「バイシャジュヤラージャよ、誰かある善男子・善女人たちがあって、この〔サッダルマプンダリーカの〕法門から一偈だけでも受持したり随喜したりするならば、バイシャジュヤラージャよ、わたしはその者たち全員が無上正等覚を得るであろうと授記する。」[109]

『法華経』は念を押して「善男子（クラプトラ kulaputra）」と「善女人（クラドゥヒトゥリ kuladuhitṛ）」を併称している。『法

華経』が授記（菩薩となること）・成仏に関して、男女の区別や差異を一切設けていなかったことのなによりの証左である。

5．日蓮遺文

最後に、日蓮の遺文を確認しておこう。参照する遺文は、『千日尼御前御返事』（弘安元年（一二七八）。五十七歳。真蹟現存）である。『昭和定本 日蓮聖人遺文』よりの引用と、『日蓮宗電子聖典』（日蓮宗、二〇〇三）を参照した口語訳とを併記する。

女人の罪障はいかがと存じ候へども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候しを、万事はたのみまいらせ候て等云云。（昭和定本一五三八）

「女性の罪障はいかに深いものかと存じてはおりましたが、お示しくださった御法門によると、『法華経』は女性の成仏を真先に考えているということなので、これをなによりもの頼みにいたしています」と記されていた。

第五の巻に即身成仏と申す一経第一の肝心あり。譬へばくろき物を白くなす事漆を雪となし、不浄を清浄になす事、濁水に如意珠を入れたるがごとし。龍女と申せし小蛇を現身に仏になしてまましき。此時こそ一切の男子の仏になる事をば疑ふ者は候はざりしか。されば此経は女人成仏を手本としてとかれたりと申す。（昭和定本一五四一）

『法華経』第五巻の「提婆達多品」で、即身成仏という法華一経の中で第一の肝心な法門が説かれ、これではっきりしたのである。例えば黒い漆を雪のように白くしたり、不浄の濁水に清浄な如意宝珠を入れてきれいにしたようなものである。龍女という小蛇を現身に即して仏に成さしめられた。この時こそすべての男子が仏に成ることを疑う者はいなかったであろう。したがって『法華経』は女人成仏をお手本として、すべての衆生の成仏が説かれた経典なのである。

「龍女と申せし小蛇を現身に仏になしてましましき」とあるように、日蓮は龍女の成仏を「変成男子」ではなく「女性の身のままでの成仏（女身成仏）」と捉えていたことが分かる。

他経但記男不記女乃至今経皆記等云云。此は一代聖教の中には法華経第一、法華経の中には女人成仏第一なりとことわらせ給ふにや。されば日本一切の女人は法華経より外の一切経には女人成仏せずと嫌ふとも、法華経にだにも女人成仏ゆるされなばなにかくるしかるべき。（昭和定本一五四一―一五四二）

「『法華経』以外の経では、ただ男の成仏については述べられているが、女の成仏については記していない。『法華経』では男女ともに成仏が説かれている」とある。これらの説は仏一代の聖教（しょうぎょう）の中では『法華経』が第一に勝れた教えであり、その『法華経』の中では、女人の成仏のことが第一であるといわれているのではなかろうか。もしそうだとしたら、日本中のすべての女性は『法華経』よりほかのすべての経で、女性は成仏できないといって嫌われても、『法華経』によって女性の成仏が許されるのであれば、少しも苦しく思うことはないのである。

小乗は女人成仏一向に許されず。大乗経は或は成仏、或は往生を許したるやうなれども仏の仮言にて実事なし。但法華経計りこそ女人成仏、悲母の恩を報ずる実の報恩経にては候へ（昭和定本一五四二）

ことに小乗仏教では女性の成仏は少しも許されていない。大乗経の中にはあるいは成仏、あるいは往生を許したようにみられるけれども、仏の仮のことばであって、事実ではない。ただ『法華経』だけが女性の成仏を説き、悲母の恩に報ずることのできる真実の報恩経なのである。

こゝに日蓮願云日蓮は全悞なし。設ひ僻事なりとも日本国の一切の女人を扶んと願せる志はすてがたかるべし。（昭和定本

一五四四）

そこで日蓮は次のような誓願を立てた。「日蓮にはまったくあやまちはないはずである。たとえ間違っていたとしても、日本中のすべての女性を扶けようと願って立てた志は捨てがたいものである。」

此御経をしるしとして後生には御たづねあるべし。（昭和定本一五四六）

この御経を証明書として、後生には霊山浄土へ尋ねて来られるがよい。

先に記したように、日蓮は龍女の成仏を、「変成男子」ではなく「女性の身のままでの成仏（女身成仏）」と捉えていた。そしてそれは、「**4—2—1．「提婆達多品」（後半）**」で見たように、サンスクリット原典（SP_S）の内容には即する一方で、日蓮の参照した『妙法蓮華経』（SP_{C2}）の表層的文面からは決して分からないことがらでもあったのである。原典を見ずして『法華経』本来の文脈を感得した日蓮の慧眼には、あらためて驚嘆の念を禁じえない。

6．結　語

仏教では、それが在家者であるかぎり、仏教徒であろうが仏教徒でなかろうが、男女を区別する姿勢は存していない。これは、インドで生まれた宗教としては画期的なことだといってよい。ところが出家者の場合は、事情が多いに異なる。比丘（男性の出家仏教徒）のカーマ（愛欲）を抑えるため、比丘尼（女性の出家仏教徒）の権利は大いに制限され、完全に比丘サンガの指導の下に置かれなくてはならなかったのである。

仏道修行のゴールを成仏へと回帰させた大乗経典の中には、サンスクリット文法上、菩薩やブッダが男性名詞であることも影

響し、男性に生まれ変わらなくては菩薩やブッダには成れないと説くものもある。一方、『法華経』では女性は女性の身のままで菩薩にもなれるしブッダにも成れる（女身成仏）と説いた。女性が成仏に際して男性に身を転じること（変成男子）は、女身のままでの成仏を信じられない者に向けられた、かりそめの手段であり「見せかけ」に過ぎなかったのである。

しかし、『法華経』が変成男子を必要とせず、龍女が女身のままで成仏できると主張していたことは、漢訳を参照するだけでは分からないことがらでもあった。そうであるにもかかわらず、日蓮が「女身成仏」という『法華経』本来の文意、真意を正しく読み解いていたことは、日蓮が『法華経』を色読・体現していたからにほかならないといえようか。

〈略号および使用テクスト〉

LSV *Larger Sukhāvativyūha.*（『無量寿経』）

LSV_S *The Larger and Smaller Sukhāvativyūha Sūtras*, ed. K. Fujita, Kyoto, 2011.

LSV_C Chinese version of the *LSV*, T. No. 360（『仏説無量寿経』二巻、康僧鎧訳）.

SP *Saddharmapuṇḍarīka.*（『法華経』）

SP_S *Saddharmapuṇḍarīka*, ed. H. Kern and B. Nanjio, St. Petersburg, 1908-1912.

SP_{C2} Second Chinese version of the *SP*, T. No. 262（『妙法蓮華経』七巻、鳩摩羅什訳）.

SP_{MS} *Sanskrit Manuscripts of Saddharmapuṇḍarīka*（『梵文法華経写本集成』全12巻）、梵文法華経刊行会、1977-1982.

DN *Dīgha-Nikāya*, 3 Vols., Pali Text Society, London.

Sn *Suttanipāta*, Pali Text Society, London.

Vin *Vinayapiṭaka*, 5 Vols., Pali Text Society, London.

Manu *Manava Dharma-Sastra: The Code of Manu*, ed. J. Jolly, London, 1887.

T. Taisho Tripiṭaka.

昭和定本　『昭和定本 日蓮聖人遺文』全四巻、総本山身延久遠寺、一九五二―一九五九。

（参考文献）

植木雅俊　[2023]　『日蓮の女性観』、京都：法蔵館文庫。

岡田真水　[2020]　『法華経』の女人成仏観と日蓮 ―「変成男子」と saṃdarśana―、『花野充道博士古稀記念論文集　仏教思想の展開』（同刊行会編）、東京：山喜房佛書林、pp. 1-20。

荻原雲来・土田勝弥　[1958]　『改訂梵文法華経』第二版、東京：山喜房佛書林。

苅谷定彦　[1991]　法華経における女性、『日本佛教學會年報』56、pp. 185-200。

桑名貫正　[1992]　日蓮聖人の女人成仏について（一）―法華経の成仏の文証に関して―、『棲神』64、pp. 25-42。

[1998]　日蓮聖人の女人成仏観、『東洋文化研究所所報』2、pp. 29-51。

佐々木閑　[1999]　『出家とはなにか』、東京：大蔵出版。

鈴木隆泰　[2016]　『本当の仏教　第2巻 ―ここにしかない原典最新研究による―』、東京：興山舎。

[2021]　『内在する仏　如来蔵（シリーズ思想としてのインド仏教）』、東京：春秋社。

[2023]　『本当の仏教　第5巻 ―ここにしかない原典最新研究による―』、東京：興山舎。

田上太秀　[1990]　変成男子思想の研究、『駒澤大學禪研究所年報』1、pp. 41-61。

[1992]　『仏教と性差別 ―インド原典が語る―』、東京：東京書籍。

田辺繁子　[1953]　『マヌの法典』、東京：岩波文庫。

中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士　[2002]　『岩波　仏教辞典　第二版』、東京：岩波書店。（中村［2002］と略称）

白　景皓　[2016]　法華経提婆達多品「変成男子」の菩薩観、『東洋文化研究所所報』20、pp. 17-34。

穂坂悠子　[2009]　日蓮聖人における女人成仏論の一考察、『日蓮教學研究所紀要』36、pp. 130-149。

宮本啓一　[2000]　インドにおける「真実の力」というもの、『仏教文化』40、pp. 23-41。

望月海淑　[1962]　女人成仏 ―変成男子について―、『棲神』36、pp. 68-78。

[1963]　提婆達多品における女人成仏について（1）、『棲神』37、pp. 44-57。

[1965]　提婆達多品における女人成仏について（2）―大宝積経を中心とせる変成男子―、『棲神』38、pp. 24-48。

［1966］　提婆達多品における女人成仏（3）、『榛神』39、pp. 23-42。
［1998］　法華経における女人成仏に就いて、『東洋文化研究所所報』2、pp. 5-18。
和田妙咲　［2020］　法華経と日蓮聖人の女人成仏思想について、『興隆学林紀要』17、pp. 57-83。
Suzuki, T.　［2014］　The Compilers of the *Bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta* Who Did Not Know the Rigid Distinction between *Stūpa* and *Caitya* in the *Saddharmapuṇḍarīka*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 133 (62-3), pp. 121-129.

注

1　鈴木［2021: 11, 25, 64-66］参照。
2　代表的なものとして、田上［1990］［1992］を挙げる。
3　代表的なものとして、苅谷［1991］、桑名［1992］［1998］、白［2016］、穂坂［2009］、望月［1962］［1963］［1965］［1966］［1998］、和田［2020］を挙げる。
4　*Siṅgālovādasuttanta*, *DN* iii 180.1-193.13.
5　本文・訳文中の原語表記は原則としてサンスクリットに統一した。
6　pitā maṃ bhante kālaṃ karonto avaca// disā tāta namasseyyāsīti// so kho ahaṃ bhante pitu vacanaṃ sakkaronto garukaronto mānento pūjento kālass' eva vuṭṭhāya rājagahā nikkhamitvā allavattho allakeso pañjaliko puthuddisā namassāmi puratthimaṃ disaṃ . . . uparimaṃ disan ti// (*DN* iii 181.3-8)
7　na kho gahapatiputta ariyassa vinaye evaṃ chaddisā namassitabbā ti// (*DN* iii 181.9-10)
8　chayimā gahapatiputta disā veditabbā// puratthimā disā mātāpitaro veditabbā// dakkhiṇā disā ācariyā veditabbā// pacchimā disā puttadārā veditabbā// uttarā disā mittāmaccā veditabbā// heṭṭhimā disā dāsakammakarā porisā veditabbā// uparimā disā samaṇabrāhmaṇā veditabbā// (*DN* iii 188.24-189.4)
9　pañcahi kho gahapatiputta ṭhānehi sāmikena pacchimā disā bhariyā paccupaṭṭhātabbā// sammānanāya/ avimānanāya/ anaticariyāya/ issariyavossaggena/ alaṃkārānuppadānena// (*DN* iii 190.4-6)
10　imehi kho gahapatiputta pañcahi ṭhānehi sāmikena pacchimā disā bhariyā paccupaṭṭhitā pañcahi ṭhānehi sāmikaṃ anukampati// susaṃvihitakammantā ca hoti/ susaṅgahitaparijanā ca/ anaticārinī ca/ sambhataṃ anurakkhati/ dakkhā ca hoti analasā sabbakiccesu// (*DN* iii 190.7-11)
11　imehi kho gahapatiputta . . . evam assa esā pacchimā disā paṭicchannā hoti khemā appaṭibhayā// (*DN* iii 190.12-15)

12 mātāpitā disā pubbā/ ācariyā dakkhiṇā disā/ puttadārā disā pacchā/ mittāmaccā ca uttarā/ dāsakammakarā heṭṭhā/ uddhaṃ samaṇabrāhmaṇā/ etā disā namasseyya alamattho kule gihī// paṇḍito sīlasampanno/ saṇho ca paṭibhānavā/ nivātavutti atthaddho/ tādiso labhate yasaṃ// uṭṭhānako analaso/ āpadāsu na vedhati/ acchiddavutti medhāvī/ tādiso labhate yasaṃ// saṅgāhako mittakaro/ vadaññū vītamaccharo/ netā vinetā anunetā/ tādiso labhate yasaṃ// dānañ ca peyyavajjañ ca/ atthacariyā ca yā idha/ samānattatā ca dhammesu/ tattha tattha yathā

13 'rahaṃ// ete kho saṅgahā loke/ rathass' āṇīva yāyato/ ete ca saṅgahā n' assu/ na mātā puttakāraṇā labhetha mānaṃ pūjaṃ vā/ pitā vā puttakāraṇā// yasmā ca saṅgahe ete samavekkhanti paṇḍitā/ tasmā mahattaṃ papponti/ pāsaṃsā ca bhavanti te ti// (*DN* iii 191.28-193.2)

abhikkantaṃ bhante/ abhikkantaṃ bhante/ seyyathā pi bhante nikkujjitaṃ vā ukkujjeyya/ paṭicchannaṃ vā vivareyya/ mūḷhassa vā maggaṃ ācikkheyya/ andhakāre vā telapajjotaṃ dhāreyya cakkhumanto rūpāni dakkhintīti// evam evaṃ bhagavatā anekapariyāyena dhammo pakāsito// esāhaṃ bhante bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāmi/ dhammañ ca bhikkhusaṃghañ ca// upāsakaṃ maṃ bhagavā dhāretu ajjatagge pāṇupetaṃ saraṇaṃ gataṃ ti// (*DN* iii 193.5-12)

14 田辺［1953: 69, 264, 163, 164］参照。

15 svabhāva eṣa nārīṇāṃ narāṇāṃ iha dūṣaṇam/ ato 'rthān na pramādyanti pramadāsu vipaścitaḥ// (*Manu* 2·213)

16 avidvāṃsam alaṃ loke vidvāṃsam api vā punaḥ/ pramadā hy utpathaṃ netuṃ kāmakrodhavaśānugam// (*Manu* 2·214)

17 paunṃścalyāc calacittāc ca naisnehyāc ca svabhāvataḥ/ rakṣitā yatnato 'pīha bhartṛṣv etā vikurvate// (*Manu* 9·15)

18 bālayā vā yuvatyā vā vṛddhayā vāpi yoṣitā/ na svātantryeṇa kartavyaṃ kiṃ cid kāryaṃ gṛheṣv api// (*Manu* 5·147)

19 bālye pitur vaśe tiṣṭhet pāṇigrāhasya yauvane/ putrāṇāṃ bhartari prete na bhajet strī svatantratām// (*Manu* 5·148) いわゆる〈三従〉である。

20 viśīlaḥ kāmavṛtto vā guṇair vā parivarjitaḥ/ upacāryaḥ striyā sādhvyā satataṃ devavat patiḥ// (*Manu* 5·154)

21 abhikkantaṃ bhante/ abhikkantaṃ bhante . . . etā mayaṃ bhante bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāma dhammañ ca bhikkhusaṃghañ ca/ upāsikāyo no bhagavā dhāretu ajjatagge pāṇupetā saraṇaṃ gatā 'ti// (*Vin* i 18.23-26)

22 ノの「3．比丘尼の場合」は、鈴木［2016: 68-85］に基づくとする。

23 sādhu bhante labheyya mātugāmo tathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ pabbajjan ti// (*Vin* ii 253.8-9)

24 muhuttaṃ idh' eva tāva hohi yāvāhaṃ bhagavantaṃ yācāmi mātugāmassa tathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ pabbajjan ti// (*Vin* ii 254.8-10)

25 bhabbo nu kho bhante mātugāmo tathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ pabbajitvā sotāpattiphalaṃ vā sakadāgāmiphalaṃ vā anāgāmiphalaṃ vā arahattaṃ vā sacchikātun ti// (*Vin* ii 254.29-33)

26 仏教は行為主義に立脚する宗教であり、その行為主義という価値観に全面的に依拠するためには、インドでは在俗生活（血統主義に基づくカース

ト社会）を離れて出家しなくてはならないため。

27 na jaccā vasalo hoti na jaccā hoti brāhmaṇo/ kammanā vasalo hoti kammanā hoti brāhmaṇo// (*Sn* 136, 142)

人は生まれ（jāti, カースト）によって卑しい者となるのではない。生まれによってバラモン（尊い者）となるのでもない。人は行いによって卑しい者ともなり、行いによって尊い者ともなるのである。

28 sace bhante bhabbo mātugāmo tathāgatappavedite dhammavinaye . . . arahattam pi sacchikātum/ bahūpakārā bhante mahāpajāpatī gotamī bhagavato mātucchā āpādikā posikā khīrassa dāyikā bhagavantaṃ janettiyā kālaṃkatāya thaññaṃ pāyesi// sādhu bhante labheyya mātugāmo tathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ pabbajjan ti// (*Vin* ii 254.36-255.4)

ヴァルシャ（Sanskrit: varṣa; Pali: vassa）。熱帯モンスーン気候のインドにおける雨季の間の定住。出家修行者が雨安居をする理由は大別して三つ挙げられる。それらは、①雨季になってあらわれてきた、野原を走る小さな虫を踏みつぶさないようにするため、②大雨のために道路や橋が流されるなどして、雨季の間の移動には危険が付きまとうから、③雨に降られての遊行が困難であるから、である（鈴木［2023: 251-252］参照）。

29 ウパヴァーサ（Sanskrit: upavāsa, uposadha; Pali: uposatha）。半月に一度、現前サンガ（界 sīmā で区切られた地域に形成されるサンガ）に所属する出家者全員が集まり、具足戒（正式な出家者が護持する完全な律）の条項（学処）を誦して、違反行為を懺悔（さんげ）し、戒める儀式。サンガの清浄（しょう）性・福田（ふくでん）性（後述）を保証するために行われる。

30 プラヴァーラナー（Sanskrit: pravāraṇā; Pali: pavāraṇā）。雨安居の最終日に行われる布薩儀式。併せてこの日には、出家者は在家信者（優婆塞・優婆夷）より新しい衣の寄進を受ける。

31 vassasatupasampannāya bhikkhuniyā tadahupasampannassa bhikkhuno abhivādanaṃ paccuṭṭhānaṃ añjalikammaṃ sāmīcikammaṃ kātabbaṃ/ . . . // na bhikkhuniyā abhikkhuke āvāse vassaṃ vasitabbaṃ/ . . . // anvaddhamāsaṃ bhikkhuniyā bhikkhusaṃghato dve dhammā paccāsiṃsitabbā uposathapucchakañ ca ovādūpasaṃkkamanañ ca/ . . . // vassaṃ vutthāya bhikkhuniyā ubhatosaṃghe tīhi ṭhānehi pavāretabbaṃ diṭṭhena vā sutena vā parisaṅkāya vā/ . . . // garudhammaṃ ajjhāpannāya bhikkhuniyā ubhatosaṃghe pakkhamānattaṃ caritabbaṃ/ . . . // dve vassāni chasu dhammesu sikkhitasikkhāya sikkhamānāya ubhatosaṃghe upasampadā pariyesitabbā/ . . . // na bhikkhuniyā kenaci pariyāyena bhikkhu akkositabbo paribhāsitabbo/ . . . // ajjatagge ovaṭo bhikkhunīnam bhikkhūsu vacanapatho/ anovaṭo bhikkhūnaṃ bhikkhunīsu vacanapatho/ . . . // (*Vin* ii 255.6-25)

32 注42参照。

33 インド二大叙事詩のひとつ『ラーマーヤナ *Rāmāyaṇa*』における王女シーター Sītā の用いた真実語の力（自らの貞操を証明）が代表例である。

34 sace ānanda nālabhissa mātugāmo tathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ pabbajjaṃ/ ciraṭṭhitikaṃ ānanda brahmacariyaṃ abhavissa/ vassasahassaṃ saddhammo tiṭṭheyya// yato ca kho ānanda mātugāmo tathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ

35 pabbajito/ na dāni ānanda brahmacariyaṃ ciraṭṭhitikaṃ bhavissati/ pañc' eva dāni ānanda vassasatāni saddhammo ṭhassati// (*Vin* ii 256.9-16)
seyyathāpi ānanda sampanne sālikkhette setaṭṭhikā nāma rogajāti nipatati evan taṃ sālikkhettaṃ na ciraṭṭhitikaṃ hoti/ evam eva kho ānanda

36 yasmiṃ dhammavinaye labhati mātugāmo agārasmā anagāriyaṃ pabbajjaṃ na taṃ brahmacariyaṃ ciraṭṭhitikaṃ hoti// (*Vin* ii 256.21-25)
佐々木［1999: 203-227］参照。さらにいえば、八敬法の（1）の規定はインドの常識にすら反するため、マハープラジャーパティーがこれを受け入れないことを釈尊は期待したのかもしれない。

37 ekāhaṃ bhante ānanda bhagavantaṃ varaṃ yācāmi// sādhu bhante bhagavā anujāneyya bhikkhūnañ ca bhikkhuṇīnañ ca yathāvuḍḍhaṃ

38 abhivādanaṃ paccuṭṭhānaṃ añjalikammaṃ sāmīcikamman ti// (*Vin* ii 257.29-33)
aṭṭhānam etaṃ ānanda anavakāso yaṃ tathāgato anujāneyya mātugāmassa abhivādanaṃ paccuṭṭhānaṃ añjalikammaṃ sāmīcikammaṃ// (*Vin* ii 257.37-258.2)

39 na bhikkhave mātugāmassa abhivādanaṃ paccuṭṭhānaṃ añjalikammaṃ sāmīcikammaṃ kātabbaṃ// yo kareyya/ āpatti dukkaṭassā 'ti// (*Vin* ii 258.8-11)

40 sacen me bhagavan bodhiprāptasyāprameyāsaṃkhyeyeṣu buddhakṣetreṣu ye sattvā mama nāmadheyaṃ śrutvā tatra buddhakṣetre cittaṃ preṣayeyur upapattaye kuśalamūlāni ca pariṇāmayeyus te ca tatra buddhakṣetre nopapadyeraṃn antaśo daśabhiś cittotpādaparivartaiḥ sthāpayitvānantarakāriṇaḥ saddharmapratikṣepāvaraṇāvṛtāṃś ca sattvān mā tāvad ahaṃ anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhyeyam /19/ (*LSV*$_S$ 18.4-10)
設我得佛，十方衆生至心信樂，欲生我國乃至十念，若不生者，不取正覺，唯除五逆誹謗正法．（*LSV*$_C$ 268a26-28）

41 sacen me bhagavan bodhiprāptasya samantād aprameyāsaṃkhyeyācintyātulyāparimāṇeṣu buddhakṣetreṣu yaḥ striyo mama nāmadheyaṃ śrutvā prasādaṃ saṃjanayeyur bodhicittaṃ cotpādayeyuḥ strībhāvaṃ ca vijugupseraṅ jātivyativṛttāḥ samānāḥ saced dvitīyaṃ strībhāvaṃ pratilabheran mā tāvad ahaṃ anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhyeyam /35/ (*LSV*$_S$ 22.8-13)
設我得佛，十方無量不可思議諸佛世界，其有女人聞我名字，歡喜信樂發菩提心，厭惡女身，壽終之後復爲女像者，不取正覺．（*LSV*$_C$ 268c21-24）

42 インドにはヴェーダ以来、サティヤのことばには願いを叶える不思議な力が宿るとの信仰がある（宮本［2000］参照）。これは、同じくインド発祥の宗教である仏教にも十全に引き継がれており、その代表例が、次に記す「四弘誓願」である。この四弘誓願を勤行や法要の際に唱え、それを実行し実現していくことで、サティヤのことばの力が蓄えられていくのである。いくつかのバリエーションがあるなかで、日蓮宗におけるものを示す（書き下し文は一例）。
・衆生無辺誓願度（衆生は無辺なれど、度せんことを誓願す）
・煩悩無数誓願断（煩悩は無数なれど、断ぜんことを誓願す）

・法門無尽誓願知（法門は無尽なれど、知らんことを誓願す）
・仏道無上誓願成（仏道は無上なれど、成ぜんことを誓願す）

43 本稿で使用したSP_Sは、SP_{MS}を参照し適宜修正を施してある。

44 厳密にいえば、「提婆達多品」は鳩摩羅什ではなく、法獻（四二四―四九九）とインドの僧法意（ダルママティ Dharmamati）による共訳とされる（岡田［2020: 5］参照）。

45 atha khalu mañjuśrīḥ kumārabhūtaḥ prajñākūṭaṃ bodhisattvam etad avocat/ sarvo 'yaṃ kulaputra mayā samudramadhyagatena sattvavinayaḥ kṛtaḥ sa cāyaṃ saṃdṛśyate/（SP_S 262.2-4）

46 atha khalu prajñākūṭo bodhisattvo mañjuśriyaṃ kumārabhūtaṃ gāthābhigītena pariprcchati sma//（SP_S 262.4-5）

47 mahābhadra prajñayā sūranāmann asaṃkhyeyā ye vinītas tvayādya/ sattvā amī kasya cāyaṃ prabhāvas tad brūhi pṛṣṭo naradeva tvam etat//（SP_S 262.6-7）

48 kaṃ vā dharmaṃ deśitavān asi tvaṃ kiṃ vā sūtraṃ bodhimārgopadeśam/ yac chrutvāmī bodhaye jātacittāḥ sarvajñatve niścitaṃ labdhagādhāḥ//（SP_S 262.8-9）

49 mañjuśrīr āha/ samudramadhye saddharmapuṇḍarīkaṃ sūtraṃ bhāṣitavān na cānyat/（SP_S 262.10）

50 prajñākūṭa āha/ idaṃ sūraṃ gambhīraṃ sūkṣmaṃ durdṛśaṃ na cānena sūtreṇa kiṃcid anyat sūtraṃ samam asti/（SP_S 262.10-263.1）

51 asti kaścit sattvo ya idaṃ sūtraratnaṃ śaknuyād avaboddhum anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃboddhum/（SP_S 263.1-2）

52 mañjuśrīr āha/ asti kulaputra sāgarasya nāgarājño duhitāṣṭavarṣā jātyā mahāprajñā tīkṣṇendriyā jñānapūrvaṃgamena kāyavānmanaskarmaṇā samanvāgatā sarvatathāgatabhāṣitavyañjanārthodgrahaṇe dhāraṇīpratilabdhā sarvadharmasattvasamādhānasamādhisahasraikakṣaṇapratilābhinī/ bodhicittāvinivartinī viśiṣṭapraṇidhānā sarvasattveṣv ātmapremānugatā guṇotpādane ca samarthā na ca tebhyaḥ parihīyate/（SP_S 263.2-7）

53 smitamukhī paramayā śubhavarṇapuṣkarataya samanvāgatā maitracittā karuṇāṃ ca vācaṃ bhāṣate/（SP_S 263.7-8）

54 sā samyaksaṃbodhim abhisaṃboddhuṃ samarthā/（SP_S 263.8）

55 なお、このことばがマンジュシュリーの発したものであることにも留意されたい。「女身垢穢非是法器」「女人身猶有五障」はシャーリプトラのことばであり、「變成男子」は後で見るように、女身のままでの成仏を信じられないシャーリプトラのために、あえて龍女が顕して見せたものである（後述）。それに対してマンジュシュリーは、女人成仏・女身成仏を否定する文脈の上には位置していないのである。

56 一劫（カルパ kalpa）の長さは、四十三億二千万年（中村［2002: 297］参照）。

57 prajñākūṭo bodhisattva āha/ dṛṣṭo mayā bhagavāñ śākyamunis tathāgato bodhaya ghaṭamāno bodhisattvabhūto 'nekāni puṇyāni kṛtavān anekāni ca kalpasahasrāṇi na kadācid vīryaṃ sraṃsitavān/（SP_S 263.8-10）

58 trisāhasramahāsāhasrāyāṃ lokadhātau nāsti kaścid antaśaḥ sarṣapamātro 'pi pṛthivīpradeśo yatrānena śarīraṃ na nikṣiptaṃ sattvahitahetoḥ/ paścād bodhim abhisaṃbuddhaḥ/ (*SP*$_S$ 263.10-12)

59 ka evaṃ śraddadhyād yad anayā śakyaṃ muhūrtenānuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃboddhum// (*SP*$_S$ 263.12-13)

60 atha khalu tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājaduhitāgrataḥ sthitā saṃdṛśyate sma/ (*SP*$_S$ 263.14)

61 sā bhagavataḥ pādau śirasābhivandyaikānte 'sthāt tasyāṃ velāyām imā gāthā abhāṣata// (*SP*$_S$ 263.14-15)

62 puṇyaṃ puṇyaṃ gambhīraṃ ca diśaḥ sphurati sarvaśaḥ/ sūkṣmaṃ śarīraṃ dvātriṃśal lakṣaṇaiḥ samalaṃkṛtam// (*SP*$_S$ 264.1-2)

63 anuvyañjanayuktaṃ ca sarvasattvanamaskṛtam/ sarvasattvābhigamyaṃ ca antarāpaṇavad yathā// (*SP*$_S$ 264.3-4)

64 yathecchayā me saṃbodhiḥ sākṣī me 'tra tathāgataḥ/ vistīrṇaṃ deśayiṣyāmi dharmaṃ duḥkhapramocanam// (*SP*$_S$ 264.5-6)

65 atha khalu tasyāṃ velāyām āyuṣmāñ śāriputras tāṃ sāgaranāgarājaduhitaram etad avocat/ (*SP*$_S$ 264.7)

66 kevalaṃ kulaputri bodhāya cittam utpannam avivartyāprameyaprajñā cāsi samyaksaṃbuddhatvaṃ tu durlabham/ (*SP*$_S$ 264.8-9)

67 asti kulaputri strī na ca vīryaṃ sraṃsayaty anekāni ca kalpaśatāny anekāni ca kalpasahasrāṇi puṇyāni karoti ṣaṭpāramitāḥ paripūrayati na cādyāpi buddhatvaṃ prāpnoti/ (*SP*$_S$ 264.9-10)

68 kiṃkāraṇaṃ/ pañca sthānāni stry adyāpi na prāpnoti/ katamāni pañca/ prathamaṃ brahmasthānaṃ dvitīyaṃ śakrasthānaṃ tṛtīyaṃ mahārājasthānaṃ caturthaṃ cakravartisthānaṃ pañcamam avaivartikabodhisattvasthānam// (*SP*$_S$ 264.10-13)

69 atha khalu tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājaduhitur eko maṇir asti yaḥ kṛtsnāṃ trisāhasrāṃ mahāsāhasrāṃ lokadhātuṃ mūlyaṃ kṣamate/ (*SP*$_S$ 264.14-15)

70 sa ca maṇis tayā sāgaranāgarājaduhitrā bhagavate dattaḥ/ sa bhagavatā cānukampām upādāya pratigṛhītaḥ/ (*SP*$_S$ 264.15-16)

71 atha sāgaranāgarājaduhitā prajñākūṭaṃ bodhisattvaṃ sthaviraṃ ca śāriputram etad avocat/ (*SP*$_S$ 264.16-17)

72 yo 'yaṃ maṇir mayā bhagavato dattaḥ sa ca bhagavatā śīghraṃ pratigṛhīto neti/ (*SP*$_S$ 264.17-265.1)

73 sthavira āha/ tvayā ca śīghraṃ datto bhagavatā ca śīghraṃ pratigṛhītaḥ/ (*SP*$_S$ 265.1-2)

74 sāgaranāgarājaduhitāha/ yady ahaṃ bhadanta śāriputra maharddhikī syāṃ śīghrataraṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhyeyaṃ na cāsya maṇeḥ pratigrāhakaḥ syāt// (*SP*$_S$ 265.2-3)

75 atha tasyāṃ velāyāṃ sāgaranāgarājaduhitā sarvalokapratyakṣaṃ sthavirasya ca śāriputrasya pratyakṣaṃ tat strīndriyam antarhitaṃ puruṣendriyaṃ ca prādurbhūtaṃ bodhisattvabhūtaṃ cātmānaṃ saṃdarśayati/ tasyāṃ velāyāṃ dakṣiṇāṃ diśaṃ prakrāntaḥ/ (*SP*$_S$ 265.4-6)

76 植木［2023: 199］は「はっきりと示した」と訳出しており、「サンダルシャヤティ」の担う意味を明示的には反映していないように見受けられる。その一方で、「はっきりと示した」とありますが、この表現は、「変成男子」すること自体よりも、女性の成仏に懐疑的なシャーリプトラにその姿

を示し、見せつけることのほうに重点があるように見受けられます〟（同、p. 200）とし、さらには、〝『法華経』の真意は（中略）女身のままで仏に成ることができるということ（即身成仏）を示すことにありました〟（同、p. 206）とも述べている。岡田［2020］とは異なり、これらはサンスクリット文法に基づいた解釈とは呼べないであろう。

77 atha dakṣiṇasyāṃ diśi vimalā nāma lokadhātus tatra saptaratnamaye bodhivṛkṣamūle niṣaṇṇam abhisaṃbuddham ātmānaṃ saṃdarśayati sma dvātriṃśalakṣaṇadharaṃ sarvānuvyañjanarūpaṃ prabhayā ca daśadiśaṃ sphuritvā dharmadeśanāṃ kurvāṇam/（SP_S 265.6-8）

78 ye ca sahāyāṃ lokadhātau sattvās te sarve taṃ tathāgataṃ paśyanti sma sarvaiś ca devanāgayakṣagandharvāsuragaruḍakiṃnaramanuṣyāmanuṣyair namasyamānaṃ dharmadeśanāṃ ca kurvantam/（SP_S 265.8-10）

79 ye ca sattvās tasya tathāgatasya dharmadeśanāṃ śṛṇvanti sarve te 'vinivartanīyā bhavanty anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau/（SP_S 265.10-11）

80 sā ca vimalā lokadhātur iyaṃ ca sahā lokadhātuḥ ṣaḍvikāraṃ prākampat/（SP_S 265.11-12）　SP_{CE}では震動したのがヴィマラー世界のみであるとするのに対して、SP_Sではサハー世界も震動したとする。これは先行する文脈において（SP_S 246.2-9）、諸仏土がひとつに統合されたことを反映するものとも考えられる。その傍証のひとつとして、「震動した（prākampat）」が「3du. Imperfect」ではなく「3sg. Imperfect」であることが挙げられる。

81 アヌトゥパッティカ・ダルマクシャーンティ（anutpattikadharmakṣānti）。一切法が空であり、固有の自性を持たず、生滅変化を超えているという道理を受け入れる（認める）こと（中村［2002: 990］参照）。「忍」は「認」に通ずる（中村［2002: 802］参照）。

82 bhagavataś ca śākyamuneḥ parṣanmaṇḍalānāṃ trayāṇāṃ prāṇisahasrāṇām anutpattikadharmakṣāntipratilābho 'bhūt/（SP_S 265.12-266.1）

83 ヴィヤーカラナ（vyākaraṇa）。原義は「解説（げせつ）」。特に、ブッダ如来が与える未来の成仏に関する予言・確約・保証を表す。仏教では、衆生は先達のブッダ如来より授記を与えられることによって「菩薩 bodhisattva（菩提 bodhi を得ることが確定した衆生 sattva）」となる（鈴木［2023: 202-203］参照）。

84 trayāṇāṃ ca prāṇisahasrāṇām anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau vyākaraṇapratilābho 'bhūt//（SP_S 266.1-2）

85 atha prajñākūṭo bodhisattvo mahāsattvaḥ sthaviraś ca śāriputras tūṣṇīm abhūtām//（SP_S 266.3）

86 サンスクリット文法上、菩薩（ボーディサットヴァ bodhisattva）もブッダ（buddha）も男性名詞（masculine）であることが、多分に影響しているものと思われる。

87 atha khalu mahāprajāpatī gautamī bhagavato mātṛbhaginī ṣaḍbhir bhikṣuṇīsahasraiḥ sārdhaṃ śaikṣāśaikṣābhir bhikṣuṇībhir utthāyāsanād yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇamayya bhagavantam ullokayantī sthitābhūt/（SP_S 268.6-8）

88 atha khalu bhagavāṃs tasyāṃ velāyāṃ mahāprajāpatīṃ gautamīm āmantrayāmāsa/ kiṃ tvaṃ gautami durmanasvinī sthitā tathāgataṃ vyavalokayasi/ nāhaṃ parikīrtitā vyākṛtā cānuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau/（SP_S 268.8-10）

89 api nu khalu punar gautami sarvaparṣadvyākaraṇena vyākṛtāsi/ (*SP*$_S$ 268.10)

90 api tu khalu punas tvaṃ gautami ita upādāyāṣṭātriṃśatāṃ buddhakoṭīnayutaśatasahasrāṇām antike satkāraṃ gurukāraṃ mānanāṃ pūjanām arcanām apacāyanāṃ kṛtvā bodhisattvo mahāsattvo dharmabhāṇako bhaviṣyasi/ imāny api ṣaḍbhikṣuṇīsahasrāṇi śaikṣāśaikṣāṇāṃ bhikṣuṇīnāṃ tvayaiva sārdhaṃ teṣāṃ tathāgatānām arhatāṃ samyaksaṃbuddhānām antike bodhisattvā dharmabhāṇakā bhaviṣyanti/ (*SP*$_S$ 268.11-14)

91 tataḥ pareṇa paratareṇa bodhisattvacaryāṃ paripūrya sarvasattvapriyadarśano nāma tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loke bhaviṣyasi vidyācaraṇasaṃpannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathiḥ śāstā devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca buddho bhagavān/ (*SP*$_S$ 268.14-269.3)

92 sa ca gautami sarvasattvapriyadarśanas tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddhas tāni ṣaḍbodhisattvasahasrāṇi paraṃparāvyākaraṇena vyākariṣyaty anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau// (*SP*$_S$ 269.3-5)

93 atha khalu rāhulamātur yaśodharāyā bhikṣuṇyā etad abhavat/ na me bhagavatā nāmadheyaṃ parikīrtitam/ (*SP*$_S$ 269.6-7)

94 atha khalu bhagavān yaśodharāyā bhikṣuṇyāś cetasaiva cetaḥ parivitarkam ājñāya yaśodharāṃ bhikṣuṇīm etad avocat/ ārocayāmi te yaśodhare prativedayāmi te/ tvam api daśānāṃ buddhakoṭīsahasrāṇām antike satkāraṃ gurukāraṃ mānanāṃ pūjanām arcanām apacāyanāṃ kṛtvā bodhisattvo dharmabhāṇako bhaviṣyasi/ (*SP*$_S$ 269.7-10)

95 bodhisattvacaryāṃ cānupūrveṇa paripūrya raśmiśatasahasraparipūrṇadhvajo nāma tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho loke bhaviṣyasi vidyācaraṇasaṃpannaḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣadamyasārathiḥ śāstā devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca buddho bhagavān bhadrāyāṃ lokadhātau/ aparimitaṃ ca tasya bhagavato raśmiśatasahasraparipūrṇadhvajasya tathāgatasyārhataḥ samyaksaṃbuddhasyāyuṣpramāṇaṃ bhaviṣyati// (*SP*$_S$ 269.10-14)

96 atha khalu mahāprajāpatī gautamī bhikṣuṇī ṣaḍbhikṣuṇīsahasraparivārā yaśodharā ca bhikṣuṇī caturbhikṣuṇīsahasraparivārā bhagavato 'ntikāt svakaṃ vyākaraṇaṃ śrutvānuttarāyāṃ samyaksaṃbodhāv āścaryaprāptā adbhutaprāptāś ca tasyāṃ velāyām imāṃ gāthām abhāṣanta//
bhagavan vinetāsi vināyako 'si śāstāsi lokasya sadevakasya/ āśvāsadātā naradevapūjito vayam pi saṃtoṣita adya nātha// (*SP*$_S$ 269.15-270.4)

97 Suzuki [2014] 参照。

98 sacet punar nakṣatrarājasaṃkusumitābhijña mātṛgrāma imaṃ dharmaparyāyaṃ śrutvodgrahīṣyati dhārayiṣyati tasya sa eva paścimaḥ strībhāvo bhaviṣyati/ (*SP*$_S$ 418.9-419.1)

99 yaḥ kaścin nakṣatrarājasaṃkusumitābhijñemaṃ bhaiṣajyarājapūrvayogaparivartaṃ paścimāyāṃ pañcaśatyāṃ śrutvā mātṛgrāmaḥ pratipatsyate sa khalv itaś cyutaḥ sukhāvatyāṃ lokadhātāv upapatsyate/ yasyāṃ sa bhagavān amitāyus tathāgato 'rhan samyaksaṃbuddho bodhisattvagaṇaparivṛtas tiṣṭhati dhriyate yāpayati/ sa tasyāṃ padmagarbhe siṃhāsane niṣaṇṇa upapatsyate (*SP*$_S$ 419.1-5)

100 lokeśvararājanāyako bhikṣu dharmākaru lokapūjito/ bahukalpaśatāṃś caritva nāyako prāpta bodhiṃ virajāṃ anuttarām// (*SP*$_S$ 454.3-4)　萩原・

土田［1958: 372］も指摘しているように、ここの「nāyako」は解釈しづらい。ただしSP_{MS}を参照したうえで、刊本の読みのままに保留した。今後の写本研究の進展が待たれる。なおSP_Sは、この**4—2—4**で取りあげた引用個所を、アクシャヤマティ（Akṣayamati°無尽意）菩薩の詠んだ偈頌と見なしている。

101 sthita dakṣiṇavāmatas tathā vījayanta amitābhanāyakam/ māyopama te samādhinā sarvakṣetre jina gatva pūjiṣu//（SP_S 454.5-6）　荻原・土田［1958: 372］も指摘しているように、ここの「te」は理解しがたい。ただしSP_{MS}に基づき、刊本の読みのままに保留した。今後の写本研究の進展が待たれる。

102 diśi paścimi yatra sukhākarā lokadhātu virajā sukhāvatī/ yatra eṣa amitābhanāyakaḥ saṃprati tiṣṭhati sattvasārathiḥ//（SP_S 455.1-2）

103 na ca istriṇa tatra saṃbhavo nāpi ca maithunadharma sarvaśaḥ/ upapāduka te jinorasāḥ padmagarbheṣu niṣaṇṇa nirmalāḥ//（SP_S 455.3-4）

104 atha khalu bhagavān bhaiṣajyarājaṃ bodhisattvaṃ mahāsattvam ārabhya tāny aśītiṃ bodhisattvasahasrāṇy āmantrayate sma/ paśyasi tvaṃ bhaiṣajyarājāsyāṃ parṣadi bahudevanāgayakṣagandharvāsuragaruḍakiṃnaramahoragamanuṣyāmanuṣyān bhikṣubhikṣuṇyupāsakopāsikāḥ śrāvakayānīyān pratyekabuddhayānīyān bodhisattvayānīyāṃś ca yair ayaṃ dharmaparyāyas tathāgatasya saṃmukhaṃ śrutaḥ/（SP_S 224.1-4）

105 āha/ paśyāmi bhagavan paśyāmi sugata/（SP_S 224.4-5）　SP_{C2}は対応個所を欠いている。

106 bhagavān āha/ sarve khalv ete bhaiṣajyarāja bodhisattvā mahāsattvā yair asyāṃ parṣady antaśa ekāpi gāthā śrutaikapadam api śrutaṃ yair vā punar antaśa ekacittotpādenāpy anumoditam idaṃ sūtraṃ sarvā etā ahaṃ bhaiṣajyarāja catasraḥ parṣado vyākaromy anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau/（SP_S 224.5-7）

107 SP_{C2}は肝心の前半部を欠いているが、「成仏の授記を受けたもの＝菩薩（成仏確定者）」という仏教における一般理解（注83参照）を合わせれば、SP_{C2}においても、比丘尼や優婆塞も菩薩であると表明されていることが読み取れよう。

108 ye 'pi kecid bhaiṣajyarāja tathāgatasya parinirvṛtasyemaṃ dharmaparyāyaṃ śroṣyanty antaśa ekagāthām api śrutvāntaśa ekenāpi cittotpādenābhyanumodayiṣyanti tān apy ahaṃ bhaiṣajyarāja kulaputrān vā kuladuhitṛr vā vyākaromy anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau/（SP_S 224.8-10）

109 ye kecid bhaiṣajyarāja kulaputrā vā kuladuhitaro veto dharmaparyāyād antaśa ekagāthām api dhārayiṣyanty anumodayiṣyanti vā sarvāṃs tān ahaṃ bhaiṣajyarāja vyākaromy anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau//（SP_S 225.8-10）　SP_{C2}は対応個所を欠いている。